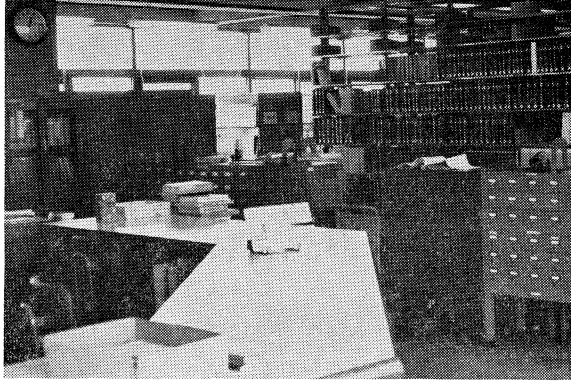


も楽しめて読書や実験，研究の疲れを癒してくれる。しかし，図書室としてはこのように実験所の最高階に位置を占めることはあまり喜ぶべきことではない。エレベータやリフトのないこの建物で，たとえば製本などのときのことを想像していただきたい。

蔵書数は約7,000冊，そのうち3割5分程度は個々の教官研究費によって購入されたもので図書室



には置かれていない。図書室にある約4,500冊のうち，大略250種の製本された雑誌が書架全体の6割近くを占めている。他にこの実験所の性格を端的に示すものとして，AEC(アメリカ原子力委員会)レポートのマイクロ・フィッシュがある。現在のところ1959年1月～1965年4月までの分，約80,000枚を所蔵している。しかしこれらの資料も所外の人に対しては閲覧以外の利用に応じられないのが残念である。

41年度の数字を見ると，増加冊数1,974冊。内訳は教官研究費によるもの937冊。図書室1,037冊(そのうち製本雑誌が525冊)，貸出冊数は1日平均1.25冊である。これらの数字と，図書館の基本的なあり方を考えあわせてみれば，この図書室の問題点がどこにあるかも明白である。先日所内で行なった「図書室利用調査について」のアンケートの集計もそのことを裏付けてい

るように思われる。

図書室の職員は現在3人(3月末までは4人)で全員司書の有資格者だが，用度掛に属し，官職も定員とか欠員不補充とかに縛られて行一，行二，定員外とバラエティに富んでいる(?)。

改善を要する点は多々あるが，二・三をあげると，重複図書をなるべく少なくして予算を有効に使うこと。目録作成の附属図書館依存をやめて，実験所の利用者の使用し易い目録を作ること。書誌分類目録を作ること。職員の官職の一元化と図書掛の新設等である。

最後をお願いしたいことは，創立後，日も浅く資料に乏しい上に僻地にあるため，研究に何かと不便が多く，よく京都の各部局へ資料の閲覧，複写依頼等でお世話になっており，今後ともよろしくお願いしたいということである。

あ と が き

はや桜の花もちって，新緑の風かおる季節をむかえてしまいました，おくれませながら，この春あたらしく京都大学の門をくぐられた1回生みなさんに「おめでとう」を申し上げます。どうか講義のあいまには，気軽に附属図書館や，教養部図書室などの本学の図書を有効に御利用下さい。

この「静脩」は，全学の図書館・図書室と利用者との対話，コミュニケーションをはかることを目的として発刊されているものですから，図書館や，読書に関する御意見があれば，最寄りの図書室職員に御投稿下さい。

なお，4月から本紙の編集は下記の18名が担当することになりました。

広庭 基介(本館)	吉井 良之(本館)	上田 展世(本館)	木村 祥子(本館)
小山 隆義(本館)	中村 久蔵(教育)	古原 雅夫(医)	若城 千代(薬)
門田 泰典(数研)	小国 健一(文)	藤本 俊(法)	沢居 紀充(経)
加藤 道子(理)	井本 夙江(工)	武内 隆恭(農)	乾 美穂子(教養)
植田 博美(人文)			

京都大学附属図書館報「静脩」Vol. 4, No. 1(通巻16号)1967年5月15日発行・編集発行人：
岩猿敏生 発行所：京都大学附属図書館・京都市左京区吉田本町・電代表77-8111(内線)2220-2238